実用性のある衣生活教育のあり方
―必要とされる生活技術と指導法の提案―

発表者　昆野領太
指導教員　薩本弥生

１．研究の目的

戦後の全体的な成長により、私たちの生活は、急速に変化し便利で簡易なものとなった。しかし、生活者の生活力はその変化に伴って反対に低下していっているといわれている。旧来、生活技術は家庭内において家事分担を通して親から子へと伝承されてきた。しかし、核家族化や女性の社会進出などの諸問題により、生活が多様化し、世代間における生活技術の伝承機能が正常に働きにくくなってきている。学校教育の場においても、家庭科学習の中で十分な生活力を養うための学習ができているとは言い難い状況にある。家庭科学習の中で、子どもたちがこれからの生活を送る上で必要となる生活技術を習得するためには、有用な内容を見極め、厳選し、現代生活に見合うよう検討していくことが必要となる。現代の子どもたちの生活、衣生活技術に関する現状を把握することによって、今後必要とされる衣生活技術について検討し、その結果から、衣生活教育の有用な学習内容について提言することを目的とした。

２．アンケート調査

２００６年１１月～１２月にかけて附属鎌倉小中学校の児童生徒および、小学生の保護者に対して家事分担の実施状況、衣生活技術の習得状況などについてアンケート調査をおこなった。配布回収方法は留置法とし、各学校訪問時に配布、約２週間の期間をおき、再訪時に回収した。有効回答率は９０．５％となった。分析には、単純集計のほか、ｔ検定・分散分析・相関分析を項目に応じて適宜用いた。

３．結果

現代に生きる子どもたちの家事分担の実施状況は非常に悪いものであった。一日の家事分担平均実施時間は２４分であり、１０分未満の回答が小中全体の３０％以上を占める結果となった。家事分担の内容も食事の片付けやごみ捨てなど時間を要しないものが

多く、時間や技術・知識を要する項目はほとんど実施されていなかった。生活時間の調査から、子どもたちの通塾率が７０％を超えるなど、家庭外での時間が多くなってきており、時間的余裕がないこと、また子どもが家事分担をおこなうことについて、親が必要と思っていないことが、主な要因と考えられる。

衣生活技術・知識の習得状況は概ね良好であると考えられる。これらは現在でも親から教わることが多かったが、家庭科学習やテレビなどのメディアなどの影響が認められる項目も見られた。また、衣生活技術・知識の能力は実行度との相関が認められ、できるできないにかかわらず、繰り返しおこなうことが適切であると考えられる。

服装やファッションに対する関心度をはかる項目をいくつか設定し、他のデータとの関連を検討した結果、服装やファッションに対する関心が高い子どもは、関心のない子どもに比べ、家事分担の実行度、衣生活技術・知識の能力、同実行度がともに高い結果を示し、服装やファッションに対する関心は衣生活の生活力向上に寄与する可能性が示唆され、衣生活を学習する上で、服装やファッションへの興味関心の喚起が重要な動機付けとなりうる可能性を持つことが確認された。

４．必要とされる衣生活技術とその指導法

第１に、洗濯に関する内容の取り扱いの検討である。小学校においては現在日常着を手洗いによっておこなうこととなっている。しかし、現代の生活では日常着を手洗いすることはまれであり、洗濯機を使った学習をおこなうことで普段の生活の中でも実行できるよう、洗濯機洗いについての学習をすることが望まれる。

第２に、整理・収納に関する内容の導入である。被服管理の重要な要素であるにもかかわらず、現在の衣生活教育では取り扱われていない。

第３に、服装やファッションへの興味を喚起する内容の導入である。服装やファッションに対する関心が、衣生活全般に関心をもつ動機付けとなることが示唆された。したがって、衣生活教育の早い段階で取り入れることによって衣生活教育の活性化につながることと思われる。

上記を限られた中で効率よくおこなうためには、パソコンの利用が有効となってくる。現在では、着装シミュレーションソフトや着装教育をおこなうソフトなどが開発されている。それらの利用によって、子どもたちの学習意欲を高めるとともに、衣生活学習全体の活性化を図ることが、子どもたちの生活力向上につながることと考えられる。